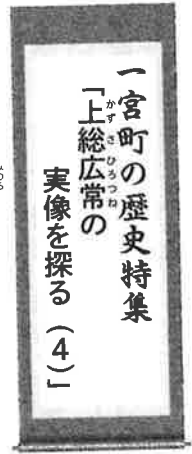


令和3年8月号



近年、野口実氏(京都女子大学名誉教授)の研究により、上総氏の実像がだいぶ明らかにされてきました。このコラムも野口氏の研究に因るところが多いのですが、野口氏は上総氏について、当時東国に割拠した小山・三浦・千葉氏といった有力武士団とは一線を画する圧倒的な勢力を保持する存在だったことを明らかにしています。

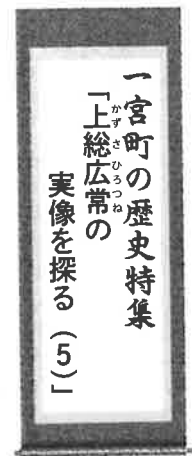
上総一國のみならず下総國の一部にまで勢力を伸ばしていた上総氏ですが、その地盤を引継ぎ、動乱の時代を生きたのが上総広常です。

広常の生年は残念ながらわかっていません。ただ諸資料に「介八郎」と見えることから、上総常澄の八男だったと見られます。

なぜ八男だった広常が上総氏(西総平氏族長)を継ぐことになったのか。この話は次回にするとし、謎に包まれた広常の前半生をみていきましょ。

広常の活動が見られるのは父・常澄在世中で、上総氏の惣領となる前の保元元年(1156)の保元の乱の

令和3年9月号



時です。この戦乱は皇位継承問題と摂関家・藤原氏の内紛により、後白河天皇(1127~92)と崇徳上皇(1119~64)が対立し、京都において武力衝突に至ったものです。広常は多くの東国武士とともに後白河天皇方の源義朝に従って戦い、勝利に貢献しました。

平治元年(1160)に発生した平治の乱の際にも広常は源義朝に従い、平氏と戦いました。『平治物語』には広常の奮戦ぶりが記されています。この乱の結果義朝は敗れ、東国に逃れる途中で殺されます。義朝の遺児・頼朝らは流刑となり、広常は平氏に従うようになったとみられます。

源義朝という後ろ盾を失った上総氏。このうち、一族間の骨肉の争いに身を投じることとなります。

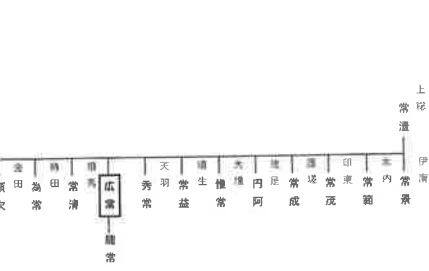
なぜ八男だった広常が上総氏の家督(西総平氏族長)を継ぐことになったのか。前回保留したこの話題を今回は見ていきましょう。

当時は長男が家督を受け継ぐとは限らず、あくまでもそれは実力に応じるものでした。そのため広常が兄弟の中でも優秀だった可能性も考えられますが、広常が上総氏惣領となるまでには、一族の骨肉の争いがありました。



▲布施家の石塔(2021年7月筆者撮影、いすみ市下布施2418)広常の供養塔と伝わる。

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42)1416



▲上総氏略系図 (西総平氏に関する系図は数多く伝来しており、不確定である。この略系図は総合的に見て信ぴょう性の高いものを採用しているが、広常が九男に位置づけられている。)

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42)1416

源義朝が亡くなったことは上総氏に大きな動揺をもたらしました。上総氏は義朝を擁立していたことにより、一族の統制を保っていたためです。そのような中義朝の死後もなくして広常の父・上総常澄も亡くなります。

上総氏を継いだのは常澄の長男の伊南常景(???)でした。常景は安房国の長狭氏と姻戚関係を結び、安房へもその勢力を拡大しようとしてます。しかし次第(常澄の次男)の印東常茂(??1180)が常景を殺害、上総氏惣領の座を強奪します。

このような経緯で常茂は上総氏惣領となったため、一族の多くは常茂から離れ、弟である広常の許に去っていったといえます。常茂は平氏と結びつくことにより、地盤を固めようとしていました。一方で広常は平氏に従ってはいないもの、かつては平氏と敵対した身であり、立場は極めて微妙なものでした。

常景の殺害は長寛年間(1163~65)とも言われていますが、はっきりとわかっていません。ただ、この対立関係は源頼朝が挙兵する治承4年(1180)まで続いています。この頃には広常は上総氏の惣領としてある程度地位を確立していたようですが、常茂はいまだ健在でした。一族間の不穏な空気を抱えた中で、源平合戦を迎えることとなります。